

# ハンドボールにおけるスローオフに関するルール変更が

## 速攻戦術に及ぼした影響

—世界男子トップレベルの公式戦を対象に—

姉ヶ山京（202010571、ハンドボールコーチング論）

指導教員：會田宏、藤本元、山田永子

キーワード：ルール変更、クイックスローオフ、ポジションプレー

### 【目的】

ルール変更がゲームパフォーマンスに及ぼした影響を検証した先行研究は、実践に有用な知見を示している。しかし、2022年に変更されたスローオフエリアに関するルール変更はまだ検証されていない。

本研究では、ルール変更にも最も素早く、最も合理的に対応する世界トップレベル男子を対象に、スローオフエリアのルール変更前後における速攻戦術の違いを明らかにすることを目的とする。この目的を達成することで、速攻の発展傾向を認識することができる。また、大学や高校における今後のスローオフ後の速攻のトレーニングの指導に役立つ資料が得られる。さらに、ルール変更が目指した「よりスピーディーに」が達成できたのかどうかについて検証できる。

### 【方法】

EHF チャンピオンズリーグ 2021/2022 シーズンと 2022/2023 シーズンの試合（計 16 試合）を標本とした。攻撃方法、攻撃結果、相手の得点からクイックスローオフ開始までの時間、クイックスローオフ時パスを受ける選手、速攻ストップ、クイックスローオフからシュート達成までの時間、クイックスローオフからシュート達成までのパス回数、攻撃展開、シュートエリア、ディフェンス形態の合計 10 項目を分析した。

t 検定、カイ 2 乗検定、残差分析を用いて、ルール変更前後の平均値と比率の差の検定を行った。統計処理の有意水準は 5% で検定を行った。また有意水準 10% 以下の場合は傾向差ありと判断した。

### 【結果と考察】

①攻撃方法は、ルール変更前と後との間に有意な差は認められなかった。変更前、変更後いずれもセットアタックの割合が最も多く、次いでクイックスローオフからの攻撃、3 次速攻の順に多い傾向を示した。このことから、ルール変更は攻撃方法に影響を及ぼさなかったと考えられる。

②クイックスローオフ後の攻撃展開は、ルール変更前と後との間に有意な差は見られなかった。変更

前、変更後いずれもポジションアタックの割合が最も多く、次いでポジションチェンジアタック、トラップアタックの順に多い傾向を示した。ルール変更はクイックスローオフ後の攻撃展開に影響を及ぼさなかったと考えられる

③ディフェンス形態は、ルール変更前と後との間に差がある傾向が認められた（表 1）。残差分析の結果、ルール変更後、非組織的ディフェンスにクイックスローオフを行う割合が増加する傾向が認められた。このことからルール変更は、クイックスローオフによる攻撃に対する防御に影響を及ぼしたと考えられる。これは攻撃がより素早く行われるようになり、相手はリトリートによってクイックスローオフに対応しにくくなっていることが考えられる。

### 【結論】

ルール変更前後で攻撃の全体像に有意差は認められなかったこと、クイックスローオフにかかる時間やクイックスローオフにおけるパス回数、クイックスローオフに関するゲームパフォーマンスの多くに有意差は認められなかったことが明らかになった。しかし、ルール変更後、相手防御が整っていない状況でクイックスローオフ後の攻撃が多く行われるようになったこと、有意差はないものの速攻ストップが 6.4%、ポジションプレーが 13.6%それぞれ増えたことを考慮すると、ルール変更によってポジションプレーによる速攻戦術は、より多く試行されたと考えられる。このことは、ルール変更が目指した「よりスピーディーに」が達成できたことを示していると考えられる。

表 1 ディフェンス形態

	変更前 (n=55)	変更後 (n=58)
組織的ディフェンス	78.2	60.3
非組織的ディフェンス	21.8	39.7
総計	100.0	100.0

数値は%を示す。カイ 2 乗=3.408,  $p<0.1$